

## 重粒子線治療の進歩と位置づけ

～病気の早期発見が基本～

沖縄県医師会は、11月22日付けで「沖縄県重粒子線治療施設導入可能性検討協議会・中間報告」を沖縄県知事宛に提出しました。県内誘致の主な目的を、県民のみならず国民的課題である肺がんの治療成績の向上と本治療手段の導入を起爆剤として、全ての領域の「がん」の診断・治療・緩和医療水準の底上げを図り、ひいては東南アジアをも視野に入れた地域経済の活性化を意図とすることがうたわれています。

時を同じくして11月21日、22日の2日間、第54回日本肺癌学会総会が東京において開催されました。会期中のシンポジウムで「早期肺癌に対する治療戦略」として「外科治療」対「非外科治療」のテーマで議論が交わされました。非外科治療（手術以外の治療法）の中には低出力レーザー照射、定位放射線治療、粒子線治療（陽子線・重粒子線）、ラジオ波焼灼療法等があり、それぞれの治療法の現状と問題点、今後の動向についての報告と議論がなされました。

従来、肺がん治療方針は、早期発見による手術が大原則として受け入れられてきました。近年、肺がんの治療が遺伝子レベルで検討される時代となったため、十分な病理組織（がん病巣）とリンパ節の情報が必要となるため、当面、手術の基本的位置づけに変化はありません。

しかし、肺がんの発見時の平均年齢が70歳代にあることと、今後の超高齢化社会の到来による肺がんの増加と糖尿病、高血圧、心疾患等の合併症をもつ患者の増加は、手術よりもさらに体に負担の少ない治療法の開発が求められています。

この時代の要求に応える治療法として定位放射線治療、粒子線による治療法が飛躍的な進歩を遂げています。放射線治療は、固定された動きの少ない臓器（頭頸部・前立腺等）の治療に有用でしたが、技術の進歩により、動く臓器のがん（肺がん等）にも積極的に用いられるようになりました。

沖縄県への誘致が計画されている粒子線治療は、治療費が高額（約300万円）であることより、施設の運営に苦勞を強いられることが予測されます。個々人に適した治療法としての手術、進歩する定位放射線、粒子線治療の使い分けを適切に行うことにより、県民に最大限の恩恵をもたらす方策を模索しております。

一つの治療手段を過大に評価するのではなく、手術・放射線・抗癌剤・免疫療法等の適切な組み合わせにより、がんの治療成績の向上を目指すことが目標となりますので、県民の正しい理解と支援を必要としております。今後、本島北部・宮古・八重山での情報提供の場が企画されています。

最新の治療手段がその威力を十分に発揮するためにも、病気の早期発見が基本になることを強調いたします。